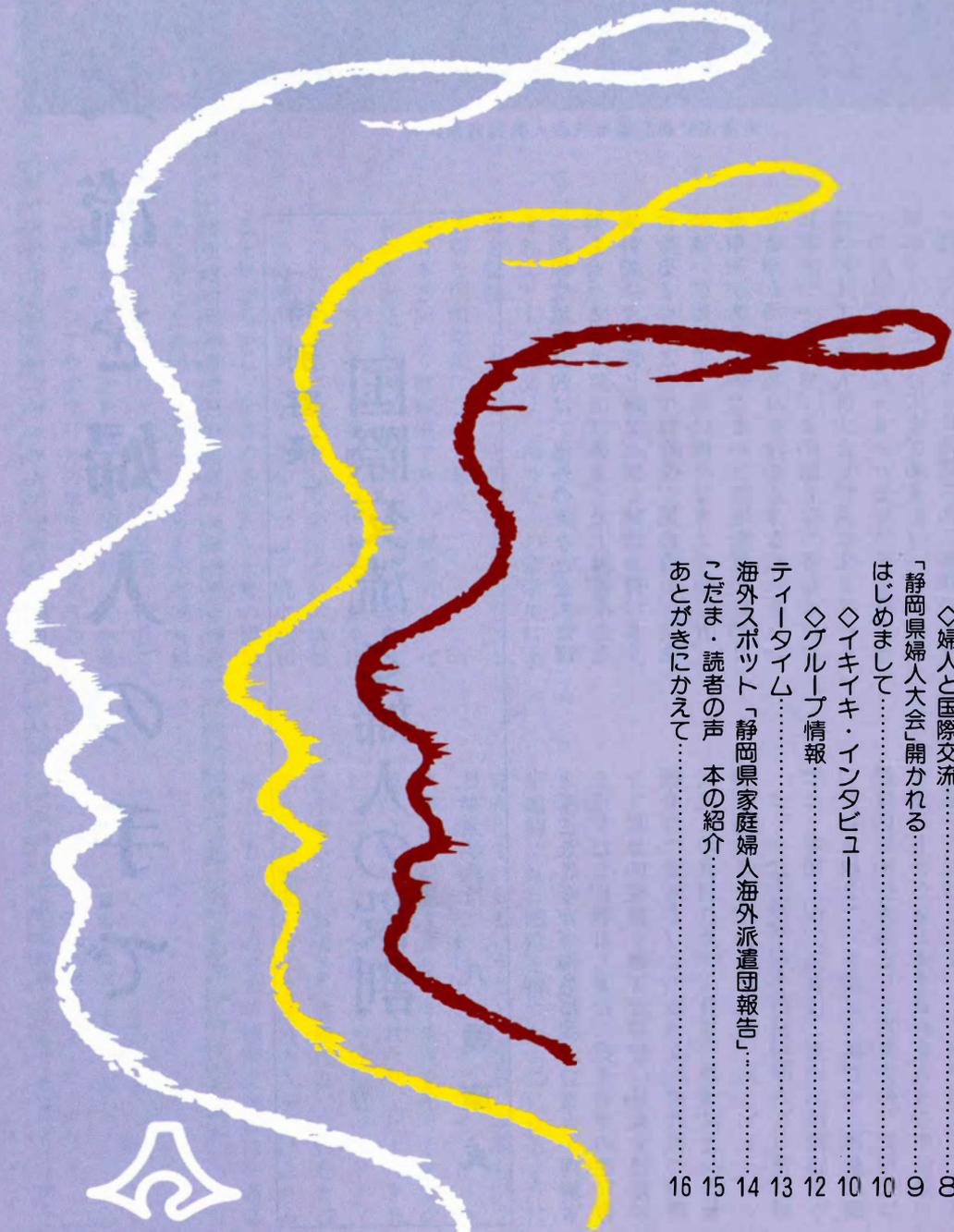


婦人のための情報誌

10号

ねとねと



目次

特集 国際交流.....	2
◇国際交流と婦人の役割.....	2
◇今、婦人たちに求められるもの.....	4
◇ホームステイで国際交流の輪.....	6
◇婦人と国際交流.....	8
「静岡県婦人大会」開かれる..... はじめまして.....	9
◇イキイキ・インタビュー.....	10
◇グループ情報.....	10
ティータイム.....	13
海外スポット「静岡県家庭婦人海外派遣団報告」.....	14
こだま・読者の声 本の紹介.....	15
あとがきにかえて.....	16



静岡県

国際交流を婦人の手で

「特別寄稿」

国際交流と婦人の役割

日本大学教授 八幡康貞

国際交流が今ほど叫ばれている時代はありません。我が国の技術革新などによる急激な経済発展は、海外の国々との間に貿易摩擦問題などを生じており、私たちが国際交流の重要性を改めて認識しなければならぬときが来ていると思われます。

県内の市町村や団体等においては姉妹都市提携事業等を通して、各種の文化交流や留学生の交換が盛んに行なわれていますが、私たち一人一人が直接海外の人々と接して、ありのままを理解しあう民間の草の根レベルでの国際交流も非常に大切です。中でも、ホームステイの受け入れなどで直接海外の人々と接することができる婦人の力は大きいものがあります。

婦人の手づくりの草の根国際交流は、地域を通して、又、自分たちの家族を通して、地道に、そして確実に海外の人々との友好と相互理解を深めていくことでしょう。

国際交流の目的は、海外の人々と互いに理解し合うことである。それは、しかし、海外の人々と同じ考え、同じ感情を持つようになるということではなく、国の違い、文化の違いにに応じて、実に様々な考えや感じ方、受取方があるものだということを互いに知り合う事が第一であり、そのような違いを互いに認め合いながら、この狭くなってしまった地球の上で、隣人同士として共に生きていくためにはどうしたらよいかということを一緒に考えるということである。

従って、マスコミに報道され、世間の注目を集めるような大掛かりな催し事もさることながら、我々一人一人が、日常の具体的な生活の場での出会いを通じて、なるべく多くの海外の人達に、「日本人の生き方や考え方も悪くはないな」と思ってもらえるようにするこ

と、これこそが、海外に我々の友人・理解者を造りだし、我々もまた、我々自身の在り方を「世界的視野」の下で学び、見直す絶好の機会なのである。このような「草の根の国際交流」の成功こそが、日本の将来にとって一番大事なことであると思う。

よく、「英語が出来れば国際人」と言う様なことを聞くが、これほど真の「国際感覚」の欠如を現している考え方はない。確かに英語は国際的な言葉として重要であり便利ではある。しかし、日本を訪れる人々の中には、英語を母国語としない人も大勢いるのであり、我々の母国語もまた英語ではないのである。「日本を訪れる」海外の人々との交流は、本来、この国の言葉である日本語で行なわれることが当然である。

言葉は、所詮心を伝え合うための道具に過



静岡県家庭婦人海外派遣団員交歓風景

ぎない。道具の方を重要視し過ぎて、人々との交わりと理解の機会を避けてしまうことがあつては本末転倒である。言葉のことで自信を無くしたり、思い悩んだりするよりも、海外からの人々に対して、十分親切にしてはあげるけれども、「あくまでも日本語」で、丁寧に、しかしはつきり物を言い、心のこもった扱いはするけれども、決して不必要な妥協や度外れたもてなしなどはしない、我々が、日本語で行なっている日常生活の中に、隠さず飾らず、外国の人を迎え入れてあげるのだという態度こそが、本当の国際理解の道である。

英語が話せなければ国際交流は出来ないという思い込みが一般であるようなので、ともすると、国際交流の行事などは、英語の出来る人の独壇場になってしまう傾きがあるが、それよりも、例えば、海外からの留学生に下宿を提供してあげることが方もっとも大切な国際交流になると思う。

日本と同じく敗戦国であり、戦後同じくゼロから出発した西ドイツは、日本の二倍に及ぶ外貨を貿易黒字で蓄積しているが、日本ほどの批判にさらされてはいない。それには幾つかの理由があるが、その一つは、既に昭和三十年ごろから、世界の各国から大勢の留学生を政府奨学金で招いており（筆者もその恩恵に浴したのであるが）、彼らを殆ど例外無しに「ドイツ・ファン」にして故国に帰しているということである。先進国の学生であろが、アジアやアフリカの学生であろうが、とにかく誰もが、ドイツ人の家庭に下宿する

ことが出来たし、下宿先の人々と結局は親しい友人になって故郷に帰り、その温かい思い出が、ドイツを第二の故里と思わざるを得なくしているのである。かつてのドイツ留学生の多くが、彼らの故郷で、政治家、政府官僚、実業家、ジャーナリスト、大学教授等、それぞれの国の世論に大きな影響力をもつ地位に就いていることは言うまでもない。

それに対して、日本は、海外から大量の留学生を招くことの意味を、長い間理解しなかつた。今日でも、その数は決して多いとはいえない。もっと大切な事は、例えばヨーロッパ人あるいは白人であるアメリカ人以外の留学生は、東京という、所謂「国際都市」においてすら、下宿を断られるという事実である。これでは、日本は、国民の税金を使って、特に第三世界の将来の指導的地位につく人物を、組織的に反日感情を持った人物になるように育成しているということになる。英語もフランス語も話せないけれど、アジアやアフリカの学生に部屋を貸し、学生達を叱りもするが、時にはケーキを焼いてくれたり、ビールをおごってくれたりした、あの少し肥ったドイツの小母さんやお婆さん達のように、広い心と毅然とした態度をもって海外の人を受け入れる婦人の力が、今の日本の国際交流には一番必要だと思つたのである。

筆者プロフィール

昭和八年生まれ
昭和35年から52年まで西ドイツ滞在中

座談会

国際交流

異文化の壁を超えて

— 今、婦人たちに求められるもの —

出席者

金子みどり さん

(グローバル文化交流協会会長)

デルミン・ケルステンさん

(主婦)

泉 陽子 さん

(主婦)

司会 編集員 加藤美百合

記録 編集員 太田美恵子



向って左より泉さん・デルミンさん・金子さん

21世紀まであと十数年、否応なく迫る国際化時代。

トップレベルの交流でなく、近隣のお付き合いの延長として、普段の交流が求められております。さまざまな国の、異なる文化があるがままに受け入れ合う。その担い手の婦人たちに今、求められているものは何か、民間レベルで、国際交流活動に携わっていらっしゃる、三人の方々のお話し合いの中から、探ってみたいと思います。

国際交流とは

◆司会 一口に国際交流と云っても、間口が広すぎて捉えにくいと思いますが、みなさんの交流のきっかけ、お考えを聞かせて下さい。

◆金子 私は方向として二つあると思います。一つは国際間の交流。

もう一つ、見失ってはいけないものとして日本の、同じ文化圏の中のサブカルチャー同志の交流。

私は同じ日本人の中に壁があると思うのです。年令や職業、地域で、若者は若者同士でなく、世代間の考え方の違いを取り除いて受け入れ合う、その行程を踏むことが、スケールを大きくすれば、国際交流だと云えると思うのです。

◆司会 日本の生活20年、流暢な日

本語は外国人とは思えません。◆デルミン 私は子供の頃日本で育ち、教育はスウェーデンで受けましたが結婚して再び日本へ帰ってきました。日本の「匂い」が懐しく嬉しかったですね。日本語を勉強する機会がなくて苦労しましたよ。肉屋で牛の泣き声を真似たりね。国際交流は広い心を持つことだと思います。

人は、顔や目の色が違うように、各々の国の習慣や文化を持ち、考え方も違います。当たりまえのことですが、自分の方が正しいと考えると、交流は難しいです。

私は外人としてではなく、人間として、その壁を取り除くために努力をしているのです。

◆司会 趣味のアマチュア無線を通して、韓国や中国との交流を深められている泉さんです。

◆泉 私の場合は言葉の勉強からでした。言葉覚えたと共に、その国の暮らしや考え方に興味を湧き、又、教えられることも多く、交流が広がりました。動機は素朴なものでした。

異文化の壁とは

◆司会 日本には、長い間の習慣や伝統、風俗などが多く、つましさが女性の美德とされてますが。

◆**デルミン** 日本人は最初、開放的で、大変親切で、国際交流し易いと思われます。でも、半年、一年経つとそうでなくなります。

◆**泉** 中国の方も同じ意見でした。中国の女性は本音で話し合いますが、日本ではその場の空気で具体性のない話題が多く、戸惑うようです。「そのうちに——」という約束はいつまでも実現しないとかね。

◆**金子** 日本人が矛盾して見えるのは、興味本位のところで西欧のものを取り入れるから、真似もし、親切であるけれど、本気で理解しようと思いはじめると、古い觀念に捉われて抵抗があり、難しいわけです。ですが、興味を持つことが理解への第一歩ですから必要なのは好奇心だと思いますよ。

◆**デルミン** もしお互いに受け入れなかつたら住みにくいですよ。

◆**司会** グローバルの外人講師による料理教室は好評だそうですね。

◆**金子** 家庭料理を通して、その国の文化、暮らしを知る、貴重で手軽な入口だと思います。食べるという共通の場を持つことで言葉を知らなくても打ちとけますから。

身近な交流の場ホームステイ

◆**司会** 家族の持つ偏見がホームステイによって改められたと——。

◆**泉** 私が最初、韓国語を習い始めた時、周囲の反対がありました。英語やドイツ語ならと。でも、交換留学生を受け入れた時から周囲の目が変わりました。

中学生の男の子でしたが、日本の子より折目正しく勉強家で、自立している彼にすっかりみせられお隣の国という親しみ、共通の言葉を発見する喜びなど、とても身近に感じられて、家族ぐるみで交流を深めることができました。

◆**司会** 生活習慣の違いからマナーの点でのトラブルも聞きますが。

◆**デルミン** 食べ物好き嫌いで注文をつける日本人留学生がいるようですが、外国では考えられないことです。ヨーロッパでは小さい

時から独立した一人の間として育てますから我儘は許されません。

◆**金子** ホームステイは交流のための最短距離で、密な関係から理解を深め合う場ですが、日本を代表しているという意識が薄れてくると共にトラブルも増えて、せっかくの機会を生かしきれないのは非常に残念に思います。

もちろん、若い人の中には自分の力で素晴らしい足跡を残される頼もしい話題も沢山ありますけどね。

◆**司会** 自分の国や街、家族などを誇りにする、それが自分を支え、守ってくれるという考えはとても大切なことですね。

◆**デルミン** 人間としての教育は国際交流だけでなく、とても大切なことです。難しいですが私の国では日本よりは意識を持っています。

一歩前進するために!!

◆**司会** 最後になりましたが、一言ずつメッセージを!!

◆**金子** 与えられた情報から、イメージを固定するのではなく、自分で情報の選択をする。たとえば、報道される一面を見て国全体を決めつけない。先入観を持たない。理屈抜きで入口に立つて欲しいですね。好奇心を持つこと、言葉は話せなくても「ハイイ」と声が出

せるようになっただけでも、前進なのですから。

◆**デルミン** 日本の女性が急に変わったらかしいですよ。自然に変化しないとね。男女平等ということでは人間として同じレベルということであり、女性の優しさや思いやりを忘れたら不幸せになります。

◆**泉** ドミニカの人を知れば、世界地図を広げて位置を調べたり、言葉は何語かしらと、興味を持ちますし、韓国や中国の地名を見れば友人の顔が重なり、具体性を持った広がりが出てきます。

私たちの力は小さなものですが、いろいろな形の交流を通して、日本のさまざまな姿を知って欲しいと努力をしています。

◆**司会** 短かい時間に有益なお話がありがとうございました。今後の皆様の活動に期待しております。

座談会を終えて

限られた誌面に絞るには惜しい深味のあるお話が続きました。長い歳月を経て培われた各々の国の文化を伝え合う難しさと、大切さを改めて感じました。

世代を超えて受容できる広い心を育てることが、結果的には、国際交流。過渡期を乗り切る責任の重さを感じました。